

隠 喩 に つ い て

E・ユンゲルの神学的視点から

畑 祐 喜

要 約

今日学問諸科において言語への関心が高まっているが、言語の諸問題の基本的な主題である〈隠喩〉について概観し、これを巡る諸理論の中、とりわけE・ユンゲルの神学的なテーゼに沿い、これを敷衍し、問題の所在を明らかにする。

隠喩(μεταφορά, メタフォラ, 希, 転義, 絵画的表現)は、はじめの一概念(ないしは語群)と決定的な関連をもって比較しうる他のものとの置換えである。文章の基礎構造(文法)においてみれば、それは主語—連辞—述語における述語機能である。例文、「獅子(王アキル)は戦場で闘う」という隠喩的な文章において決定的な点は(王アキルの)勇猛さである。比喩的な言述によれば、アキルは獅子のように、勇猛に闘う、ということになる。

隠喩は、ギリシャ・ラテンにおいては、修辞学の枠内にある非本義的な語りの形式にすぎなかった。アリストテレスは「詩学」の中で隠喩を、異なる名詞(または語)の転用と定義したが、古典から19世紀にいたるまで、

修辞学では、類似によって比喩的な語が、文字通りの語に置き換えられる文彩(あや, 詞姿), あるいは短縮された比喩にすぎなかった。この伝統的な修辞学的前提に疑問を投げかけたのは、現代の意味論 Semantique, とりわけ英国の I. A. リチャーズ, マックス・ブラックなど、英語圏の理論家たちである。意味をもつものは語詞ではなく、文全体であり、特有の文脈(コンテキスト)とコミュニケーションの中で他の語と対立することにより、隠喩的な意味を受けとることを明らかにして、修辞学的にではなく、意味論的に、テキスト理論に立って隠喩を定義し直した。意味論と並んで隠喩の基本的意味を解明したのは言語学である。R. ヤコブソン)「一般記言学」は、言語体系の性格から、隠喩と換

喩 (metonymie メトニューミー, 関連性による比喩, 詳しくは提喩シュネクトケー, すなわち全体と部分, 種<特殊>と類<普遍>を言い換える換喩の一種, および換称アントノマシア—対話法<メリズム>を含む) を, ソシュールの, パラディグマ的/シンタグマ的 (定義付けられた<連合的>/定義する<統合的>) 関係の対と, 対照的な対であることに気付いた。これは, 人間の言語の二つの基本的機能のモデルであり, これを解明することによって, 隠喩は構造主義の種々の理論に意味あるものとなった。文献学, とりわけ米国に代表されるその理論家たち (R. Funk, J. D. Crossan) は, 以上のような言語の隠喩的機能を背景に, 譬えの文学的類型を問題にし, 譬えは物語りとして展開された隠喩だと考える。そこにはクロッサンのように構造主義的な方法で物語りを理解しようとするものと, シュライエルマッハー以来の伝統的な系列に立ちつつ新しい解釈学の立場で, 言語の隠喩的な機能を端緒にこれを解こうとするヴィア (D. D. Via) や, ポール・リクール (Paul Ricoeur) などの方法と, 二つの流れがある。リクールによれば, 譬えは意味論の示唆に従って隠喩的に理解されねばならない前景的な物語りである。この物語りと, そこに記述されている現実との間に, 意味の緊張が成り立っている。

この他, 隠喩に関しては, 記号論 (W. ケラー), 旧約神学 (C. ハルトマイヤー), 新約学 (H. ヴェーデル), 教義学 (E. ユンゲル), 哲学的解釈学 (J. ハーバーマス,

H. G. ガダマー) 等, 広範囲に研究されている。

20 世紀の神学における隠喩の研究は, 「譬え」の研究の枠内で始まった。A. ユーリッヒャーはアリストテレス修辞学から出発し, 隠喩を寓話 (アレゴリア) の前形式と定義した。しかしその後継者たち, C. H. ドッド, J. エレミアス等の間で, 隠喩の位置が変わった。譬えは, イエスの神の国の説教に適合した語らいの形式であり, その限りにおいて固有の言述である。そこで譬えを一つ一つ史的イエスに引きもどそうとする E. フックス, ユンゲルなどの新解釈学においてこれはさらに強調される。

隠喩の論理分析に対する関心がこのように諸学科の間に高まってきたが, そもそも解釈の問題が生じてくるのは, 記述されたテキストがあるからであり, その解釈のために指定される諸問題と, 隠喩が指定する諸問題の結合が問われているからに他ならない。聖書テキストに依っているキリスト教信仰と神学にとって, 解釈問題ははじめからの問題であった。聖書解釈史において, 修辞学, 言語学, 意味論等の諸学科が明らかにしてきたことが援用され, 聖書解釈が発展してきた側面もあると同時に, 聖書テキストの固有性が, 神学的解釈を「特有」なものにし, テキスト解釈にまつわる一般諸学科の方法を逆転させることも起った。そこでさらに, 隠喩問題と, 神学がこれにどのように関わっているかについて, とりわけリクールとの対話によって樹てられたエーベルハルト・ユンゲルの 25 のテー

隠 喩 に つ い て

ぜを引用・要約・敷衍しつつ概観しよう。

隠喩的な言述は、修辞学的な枠内にとどめられた転義的な言葉でも、多義的な言葉でもない。特別な様態をとる本義的な言葉である。そしてこの特別な様態という点で精密な言葉である。隠喩は、世界とこれを記述する言葉、すなわち、世界との一致を追求する自然科学的な言葉と対立する。この言葉はまた、徹底して確定しようとする定義的な言葉である。隠喩的な言葉がこれと対立し区別される点は、本義の一転義的、精密—多義的の相違にあるのではない。それは、隠喩の語り方 *Redeweise* が語り掛け *Anrede* だという点にある。したがって、隠喩は定義と同様、何とかをその何とかとして言表する限りにおいては、比較しうる機能がある。もちろん、いぜんとして異なる点は、ある内実 *Sachverhalt* を言語化しようとするとき、隠喩は、これと対比する全く新しい内実を援用することによって、定義が確定するところを、言語上、動きの中に置こうとすることにある。すると、定義が言語上限定・確定的であるのに対して、隠喩は自由だということになる。

神学問題として考え、聖書テキストとまた教会の伝統に関して言えば、「神」ないし「神のわざ」に関して言い表わす適切な言述は、譬えの本源的な意味に関する史的な問題の一部となる。解釈の標識となるのは、言語そのものである。言葉は、「神」がこの言葉において語り出すとき、出来事となる。そのようにして、その使信（メッセージ）が人間の現実と言葉を超越する。そこで、記述不可

能なこの神の使信を適切に書き換えうる可能性として、類比（アナロジー）的な性格をもつ隠喩が使われる。神学的な言述はすべて隠喩的である。もちろんこの隠喩の論理の問題は錯綜していて、これを完全に解明していくことは、いぜんとして困難であり、同様に類比との関係についても、一般に混同されやすい。しかしこの概観の枠内で隠喩の類比的な性格を示す一例をあげれば、「映画スター」とか、「あっと言わせる場面（シーン）」などの隠喩は、構造上類比に関係すると言えよう。しかし「主はシオンから吼える」（アモス 1, 2）などの言葉は、もちろん類比的な意味ではない。いずれにせよ、記述不可能な神と、記述可能な世界とが、人間にとって出来事になりうるのは、隠喩という括弧がそれを集約するからである。以上のように、神学的記述として隠喩が使われる理由は、さらに、神について言表しようとする者自身についてみると、その思考においてどうしても非—隠喩的、直接的な表現を好むということにもあろう。まず聞き手の熟知している何かを、鋭く思い出させつつ、しかも新しい文脈、新しい適応において聞きとれるようにさせなければならない。このために隠喩は最上の、事態説明に平易な手段なのである。次いでまた、言表不可能であるにも拘らず、聞き手の側からみれば、記述言語に表現されることの期待はいぜんとしてあり、またその可能性に疑念を持っていないわけであるから、それに対応した言辞としての隠喩が、神学的言述として採用されるわけである。こうして、ヤーウェ

が人間にじかに接することが表現される。

「彼らは、日の涼しい風の吹くころ、園の中の主なる神の歩まれる音を聞いた」（創世記 3・8）などがそれである。

隠喩は、日常使われない言葉ではない。日常使われない言葉を援用する述語である。隠喩的な表現の中に述語として作動する言葉が用いられ、その時その言葉の元の意味は前提になっているにしても、今は、その語によって記された内実（その固有な意味 *Proprie-Bedeutung*）に対する通常の関係 *Bezogenheit* を失う。「キリストはぶどうの樹である」という文章で、念頭にぶどう園のぶどうの樹を思い浮べるのではなく、キリストを考えなければならない。ここに用いられる場合に生じる通常の意味の解体 *Destruktion* は、通例、文脈が持っている意味内容の中で、この語に近接する意味の局面で起こされる意味交換の選択によるその語の、新しい意味によるのである。この意味交換によって、隠喩的な表現の中に、文法上の主語が追求収得する *profitieren* 解釈学的な緊張が生じ、この主語が、存在 *Sein* において精確に計られる。

隠喩は、人間の言葉が一般的に隠喩的な構造を持っていることへの想起である。人間はそもそも人間の言葉で語り掛けられた者 *Angesprochener* である限りにおいて、またそうした存在であることに基いて、その結果、自分に語り掛けてくる世界と共に、言語化するのである。そのように、存在するものからの *von Seiende* 語り掛けを世界として *als*

Welt 受けている限り、一般的に人間の言葉は隠喩的に構成されている。

一般的にみて、隠喩的な言語構造は、現実と真理と自由の関係を明らかにする。この構造は、出来事の真理に拠っている。この出来事があるからこそ、世界は言語化され、したがって存在するものが、発見されるものとなる。存在するものを通して自らを発見させるこの真理は、すでに発見されているものにより、一つの関連の中に運び込まれることによって出来事となり、この時に、発見の対象の中に発見されるものとの一致が完成する。発見する者は、語り掛けられた（発見された）者として自らを打明ける限りにおいて、すでに発見されている者なのである。ここで言う「発見する」という意味は、ある何かを、その何かとして事実そのとおりに（真に）－受け取る *wahr-nehmen* ということであり、それは、言葉において生起する。したがって真理の本質は発見させることであり、言葉の本質は真理と言葉をそのように一目瞭然 *anschaulich* とさせることであり、そのように具体的 *konkret* である。存在するものから言語への移行は固有な出来事であり、言葉の隠喩的な構造は、この出来事としての真理に拠っているが、この構造は、話す者の自由である言語選択の自由を包含している。そしてこの言葉の自由は、人間と世界、すなわち人間が宇宙論的に理解する世界、そしてかれが人間学的に自己理解するその世界との相互作用によって限界付けられる。

神学的な営みの発端は、人間の実存的必要

隠 喩 に つ い て

や困窮や懐疑にあるのではない。むしろ、人間が「言葉の流れ」の中に現在巻き込まれていること、そこにある。あるいは、この流れが、人間の思想なり疑問なり同意なりを生ぜしめると言ってもよいであろう。神学は、「約束（旧約）から成就（新約）に通じる伝承の流れ」の中に自己を発見する出来事を、精密に語ることによって、自らの主題を正当なものとする。

キリスト教信仰の言葉は例外なく隠喩的である。しかしその点では、諸宗教の言葉も同様である。信仰と宗教の区別は、言語を隠喩的に使用するしないによってではなく、隠喩をどのように使うかによって定まる。キリスト教信仰の言葉は充溢する余剰 *ein Mehr* が存在にふれて言葉となるような仕方で、真なるもの *Wirkliches* を言述する。この「存在獲得」は、実在 *Wirklichkeit* を経験したことを証明しなければならない。その言葉は真なるものを概念に置き換えたにすぎない模写では不足である。キリスト教信仰はこの存在獲得を「罪人の義認」だと宣べ伝えるが、なるほどこれはイエス・キリストの生と死と復活を根拠にして、実在的 *wirklich* に存在するにちがいないが、世界に対しては潜勢力 *Potential* としてであって、この語り掛けを受けた人びとは、その獲得されたことを出来事化する言語に表現しなければならない。この真なるもの、実在を損わず減少させず、適切でより豊かな陳述へともたらず言葉は、基本的な意味においてそれと呼応する。信仰の言葉は、言表された言述として、語り

掛けの言葉である。この言表と語り掛けという二つの性格は、ただ方法論的に区別されるにすぎない。この両者を統一する基本的事例は、物語りである。あるいは、他の事例は、ケリュグマ（宣教）的宣言 *Proklamation* であり、また相同性 *Homologie* である。

宗教は、存在獲得を言葉によって出来事化させるが、その言葉は隠喩的である。キリスト教信仰の言葉も隠喩的である。イエス・キリストにおいて世界に到来した神を言述する言葉として、その隠喩は独特である。

キリスト教信仰の言葉において、神学的な隠喩は特別な機能をもっている。それは、人間の非存在の可能性が単に神によって克服された可能性としてではなく、神によって、しかしイエス・キリストの生と死と復活において唯一回限り克服された非存在の可能性として、人間の経験の関連と一致させるように働くからである。

神について語るキリスト教の言葉の特別な困難は、世界の存在に属さず、しかもそうでありつつ世界に存在するものと関わって、世界に到来する、そのような神について語らねばならないことにある。そしてこの言葉は、その限りにおいて、この存在獲得の出来事に即応するのである。それゆえ、世界にある手段をもって、世界の中にこの神のための場が獲得されるように神について語らねばならない。しかしあくまでも、神がイエス・キリストにおいてこの世界に到来したときに神が要求した、その場でなければならない。こうした困難な課題を解決していく上で、隠喩は構

造的に満足を与えうる。神は、語り出すという手段をもって、ここに場を獲得したことにより、世界の地平は拡大し、その現実（問題性と価値）が、より鋭く捉えられるようになる。これに即応して、信仰の言葉は、人間に対して語り掛けることによって、現実存在すること以上に現実の意味を鮮明にする。この対応的な語り掛けは、隠喩的な言述において、隠喩的に生起する。

以上の概観のように、今日諸学科において隠喩は単なる修辞学上の枠を越えた、言語の本質に関わる言述として取り上げられるようになり、言語の論理としての隠喩を分析し、隠喩の論理を明らかにすることは、思考の地平を拡大する約束豊かな作業となった。キリスト教神学も近年とりわけ教義学と釈義神学において、その解明を課題とし始めた。ハンス・ヴェーダーが「隠喩としてのイエスの譬え」を書いて、リクールやユンゲルの理論を発展させ、ハンス・ペーター・ミュラーは、旧約聖書の隠喩研究に豊富な材料を提供する「雅歌（ソロモンの歌）」における「譬えと隠喩」の小論を書いて、人間性（フマニテート）理解への新しい視点と端緒を開いた。

しかし、大きい隠喩の流れである物語りのもとより、複雑な隠喩そのものの論理解明がいぜんとして困難であって、少しく前景に退き、最少単位の素材から手がけて、再度方向付けられた隠喩研究に進むのがのぞましいとすれば、歓呼アックラメーション（ハレルヤ、ホサナ等）、頌栄ドクソロジー（*aksios ei*, ~に栄光があるように）の研究から始めるのが

至当であろう。聖書テキストに関する釈義的な神学の言葉（例えば「サマリヤは破壊された」）は、史的（ヒストリーリッシュ）情報（確言）に属し、その承認了解は、形式的・概念的な言い方をすれば、「分析的」であり、これに対する宣言（ステイトメント）類型に属する言葉（例えば「サマリヤの破壊は神の審きであった」）は、「総合的」であると言えよう。この場合、後者のような総合的判断は、分析的な判断に基礎付けられるわけでも、帰因するわけでもない。サマリヤの崩壊が神の審きによるという「総合判断」を生み出す原因は、自分に差し向けられるこの報知そのままをもって「祈る」ことで神に向うという、そのことの中にある。それは史的事実の分析的な探究の結果ではない。この祈り、あるいは信仰の「告白」を起源として「ドクソロジカル」な言語がある。聖書の隠喩はこのドクソロジカルな確言、頌栄に基づいている。この両者は形式的にも要約的な短形であり、語り手と聞き手がつとに熟知している語り言葉の形をもっている。ただ頌栄は必ずしも隠喩的な言葉を要するとは限らない。背景に溯って、このドクソロジーを明らかにすることから、再び隠喩の問題を手掛けてはどうかというのが、この場合の提言である。

以上のような意味で、隠喩はいぜんとして興味を中心にある。他の諸学科におけると同様、神学の実践的な部門、例えば牧会学（*Seelsorge*, *Seelsorgepraxis*, *Pastoral – Klinikum*, etc.）などにおいても、この問題は展開されていくであろう。それは丁度、

隠 喩 に つ い て

「病氣」の分析的な理解から、総合的な「臨床の知」に向う関心と、この知の論理解明とに比せられる展開であろう。

主 要 参 考 書

- 1) Michael Bies, Metapher, in Taschenlexikon Religion und Theologie, Bd. 3 . S. 261 f. 1983, Vandenhoeck & Rupprecht, Göttingen.
- 2) Paul Ricoeur, Eberhard Jüngel, Metapher, (Sonderheft Evth.) 1974. Chr. Kaiser Verlag München.
- 3) Dietrich Ritschl, Memory and Hope, 1967. The Macmillan Company, NY.
- 4) Hans Weder, Die Gleichnisse Jesu als Metaphern, 1981, Vandenhoeck & Rupprecht.
- 5) Hans-Peter Müller, Vergleich und Metapher im Hohenlied, 1984. Vandenhoeck & Rupprecht.
- 6) 中村雄二郎 《術語集》 1984 年, 岩波新書
- 7) 《聖書と教会》 <特集, 比喩> 1979 年 7 月号 No. 160. 日本基督教団出版部.
- 8) ポール・リクール 《解釈の革新》 (論文集) (久米博, 清水誠, 久重忠夫編訳, 1978 年 白水社) .
- 9) ポール・リクール 《現代の哲学》 II (言語・行為・ヒューマニズム) 1982 年, 岩波書店
- 10) エバハルト・ユンゲル 《神の存在》 大木英夫, 佐藤司郎訳, 1984 年, ヨルダン社.
- 11) ハンス-ゲオルク・ガダマー 《哲学・芸術・言語》 (小論集) 齊藤博, 近前重明, 玉井治訳, 1977 年, 未来社.
- 12) ヤコブソン 《一般言語学》 川本茂雄監修, 1973 年, みすず書房.
- 13) ポール・リクール 《生きた隠喩》 久米博訳, 1984 年, 岩波書店.

Über die Metapher

Von den theologischen Ansichten E.Jüngels

Yuki Hata

Diese Erwägungen sollen eine Einführung in die "Metapher" in ihre sprachliche Frage im allgemeinen, insbesondere in das dogmatische Denken Eberhard Jüngels (Professor an der Universität Tübingen) geben, was für die Bedeutung der Metapher in theologischer Reflexion zu tun ist.